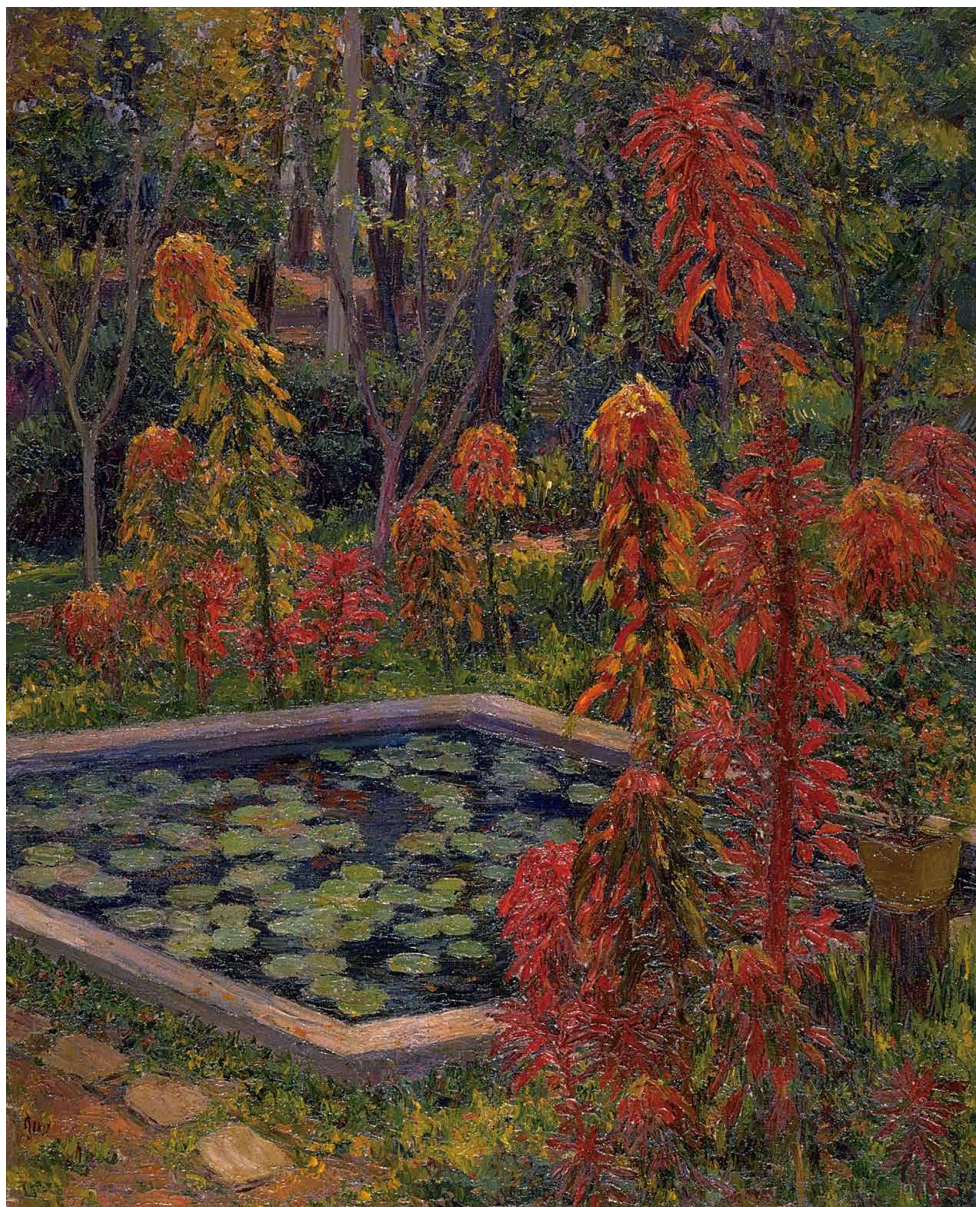


アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



児島虎次郎（明治四年～昭和四年／一八八二～一九一九）
《酒津の庭（睡蓮）》
キャンヴァス、油彩
八二・〇×六五・〇cm
大正三年～昭和三年（一九二四～二八）頃

画面右手前、あでやかな朱色を見せているのは葉鶏頭。晩夏から秋にかけて色づく。左奥にもうひとつ群生があり、重みでしなった姿を反復している。これらの間に置かれた池はくつきりとした直線の枠を持っており、葉鶏頭のゆるやかな曲線と対比の妙を見せる。画面右端の四角い植木鉢が池の形を小さく繰り返しているのも楽しい。

池の水面には睡蓮の葉が浮かぶ。緑がかつた明るい水色は葉鶏頭の朱色と補色をなし、互いを鮮やかに引き立て合っている。後景には雑木林があり、抑えめの色調で前景を引き立てつつ、適度な隙間をつくって風を通し、画面の息苦しさを救う働きを見せる。

なお、伝来しているタイトルは《酒津の庭（水蓮）》であった。「水蓮」は「睡蓮」のあやまりと解釈し本稿では「睡蓮」を採用したが、あるいはあえて当て字を使って「水」のイメージを喚起しようとしたものかもしれない。

（前上席学芸員 村上敬）

No.
143
2021年度 | 秋 |

なぜ風景の美術館なのか

館長 木下直之

「美術館の黎明期」というファイルを一冊つくりました。「一冊」とはいかにアナログですね。電子データでは不安極まりない、この手でしっかりとコクヨファイルに綴じた紙の束をつかんでおきたい。こうして書棚にファイルが増えてゆくのですが、先人みうらじゅんの足元にはとうてい及びません。何しろ、みうらさんはコクヨから表彰され、黄金のスクラップブックを贈られたほどです。うらやましい。

こんな与太話で始めるから、いつもスペースが足らず尻切れトンボになってしまう。しかし幸いにも、編集担当学芸員からも一頁もらうことが出来ました。開館三十五周年記念に浜松市美術館で開催する移動美術展「風景と人間」について、館長自ら何か書けと命じられたからです。庇をお借りする浜松市美術館も今年が開館五十周年、いわば十五年先輩美術館で後輩美術館がその成長ぶりをお見せするという展覧会なので、まさしくファイル「美術館の黎明期」の出番です。まずは「コレクションについて館長

が知らなかったこと」（前号）の続きから。開館前の構想は、県立美術館ではなく県立美術博物館でした。そこからなぜ「博物」の二文字が外れたのか。

一九八二年九月の突然の方向転換（昭和六一年度年報）を知る手立てはあまりありません。八〇年七月一日に「静岡県立美術博物館の建設計画に関する答申」（同建設計画委員会）が出されたからの二年間に攻防戦があったようです。答申を踏まえた「資料収集方針」は「当面第一段階は美術部門を中心」としましたが、資料選定委員会は美術博物館を前提に構成されたため（委員七人で歴史、考古、民俗、美術をカバー）、コレクションのあり方をめぐって次第に軋み始めます。

作品購入が始まり、建物の設計も進むにつれ、看板と実態との乖離が大きくなりました。中身もそれを入れる器も、同時に作らねばならなかったのです。収蔵庫と展示室の広さは、収集し展示するものと表裏一体です。実現を目指していたものは美術館であり、歴史、考古、民俗部門の展示は設計に織

り込まれませんでした。教育長が博物館を「いつ、どこに、どのように建てるかは、美術館が完成した段階で考えたい」と八二年十月十三日の県議会商工文教委員会が発言したあと（「朝日新聞」同月翌日）、誰かがこの問題を「考えた」のか、寡聞にして知りません。

この間に、こんな議論がありました。八一年五月二十七日に、「①江戸時代の美術作品、②明治時代以降の美術作品、③日本美術作品に影響を与えた中国美術作品、④⑤⑥略」をうたった「資料収集計画」が公表されると、静岡県美術家連盟が「中国絵画の流れが重視され現代美術が疎外」と批判して「近代美術館」の建設を求め（「要望書」七月五日）、資料選定委員のひとり「近代現代美術、就中現代美術に重点をおく」ことを主張したのです（牧田喜義「これでよいか静岡県立美術博物館」翌八二年五月八日）。

批判を浴びたこの方針から、いつ「山水・風景画」という言葉が登場するのかが、私の関心事です。一九八六年に、当館は「東西の風景画」展で柿を落としました。図録巻頭に挨拶を寄せた県知事山本敬三郎は「山水画、風景画のコレクションの充実に努めてまいりました県立美術館の開館を飾るにふさわしい展覧会」とし、初代館長鈴木敬は、「当美術館の作品蒐集の基本方針は、

おおよそ一七世紀以降の山水、風景画を中心とすることが決定されており」と明言していますから、五年前の「資料収集計画」は、そのような文言に練り上げられたということになります。以後、それが踏襲されます。

山水画と風景画を並置するのは、まさしく「東西」という発想によるものであり（南北の入る余地なし）、先の計画①と③を「山水画」、②と⑤「美的評価の定まった国外、ことに印象派以降の作家の作品」を「風景画」と呼び分ける図式的な捉え方です（西洋のLandscape Paintingの和訳であったとしても、風景それ自体は古い漢語）。

この使い分けを誰がいつ始めたかを知りたいと思ひ、当時の記録を探しましたが、美術博物館建設準備室による、したがって八二年九月以前の手書き文書があり、そこには「山水・風景画等自然を題材とした作品を収集することの理由」がつぎのように説かれていきます。議会向けの説明でしょうか。

「国内外の多種多様な美術鑑賞の機会を通して、本県の豊かな自然と長い歴史の中で培われて風土を今一度振り返る機会を提供することにあると思う」。そして「東洋、西洋の美術史を体系的に展望」（とはいえわずか五行で説明）した後に、「このように、東洋、西洋の美術において、自然を題材とし

た山水画・風景画は比較して鑑賞するのに最も共通するテーマでもあり、更には、東西文化の相違点を県民に理解してもらうのに大きな効果が期待されるものである」。

なぜ風景と人間なのか

風景を通して風土を見つめることを目標にし、美術鑑賞教育に効果が大きいとする期待は、まさしく美術館が社会教育法と博物館法に基づく社会教育施設と見なされていたからです。

こうして開幕した「東西の風景画」展に、言葉ではなく、展示で批判した美術家たちがいました。展覧会はずばり「風景展」、会場は清水市民会館、会期は五月二十七日から六月一日まで、「東西の風景画」の千秋楽もまた六月一日でしたから、照準をピタリ合わせたのです。

筆者不詳の開催趣旨には「官製風景展」という明治の官展（一九〇七年に創設された文部省美術展覧会）を連想させる大時代的な表現があり、それには賛同できないものの、先に引用した収集計画⑤などは批判されてやむを得ないかもしれません。それが悪いことではないと断りながらも、「東西の風景画」展は「風景画」を成り立たせている自然観について、常識的な見解を県民に対して教化化する」ものだとしています。「今、とりわけ「風景」

を名指す意図に、教養に名を借りた、文化のたい廃を感じないわけにはいかない。他方、自分たちの「風景展」は「人間、物質、自然との関係を絵空事ではなく、それらの条件を最基底で問い直す」と宣言しました。

三十五年前のこの批判に応えたい、そう考えて、浜松市美術館での移動美術展を「風景と人間」と名づけたのです。そして、先の収集計画①から⑥をシャッフルして、「天」「地」「人」「天」と地をつなぐ富士、「地と人をつなぐ物語」と組み立てました。風景と人間は別個の存在として向き合っているのではありません。風景の中に人間が包まれている。いや、人間が風景を作り出す。みなさんが見ている風景は、みなさんにしか見えていないのです。展覧会場に並んだ絵は、まずは画家たちが目にして、そこから作り出した

風景です。美術とは人間が作り出した、極めて人間臭い世界です。たとえ描かれたものがどれほど無垢の自然であったとしても。そう考えれば、むしろ「絵空事」は言い得て妙です。展覧会の醍醐味とは、そこに遊ぶことでしょう。古くから信仰の山として仰ぎ見られて来た「天と地をつなぐ富士」では、とりわけ遊び甲斐がありそうです。

その際、ひとつ外したいメガネがあります。「名品」という言葉です。フアイル「美術館の黎明期」において、「名品」はいっせいで登場するのか。開館に合せて刊行した『藏品目録 一九八六年版』で「山水・風景画の名品を収集」と書いたのが早く、「収集に当たっては、画家の最良の作期を選んで」とまで断言しています。

これまでに築いてきたコレクションから、移動美術展のためにあえて飛びきりの名品を選び、それゆえに「超名品展」というサブタイトルをつけました。展覧会では、まずは画家たちが見た風景へと案内されます。

しかし、それから先は、今度はそれが名品であるというメガネを外して「いわば超名品として、自由に、気ままに風景の中をさまよい歩いてもらおう」と思います。「超」にはこのふたつの意味を込めました。

かつて、近世の美術の比重が大き過ぎ

ぎるといふ批判を浴びたわけですが、結果として、それらは当館にとつて大きな財産になったと私は確信します。美術館がつねに現代社会と向き合うことと現代の美術を重視することは別問題です。むしろ、現代人とは異なる発想や価値観、技術や手法から生まれたさまざまな造形表現に触れることは、私たちの文化や社会のあり方を見つめ直す上で計り知れないほど有意義だと思っております。

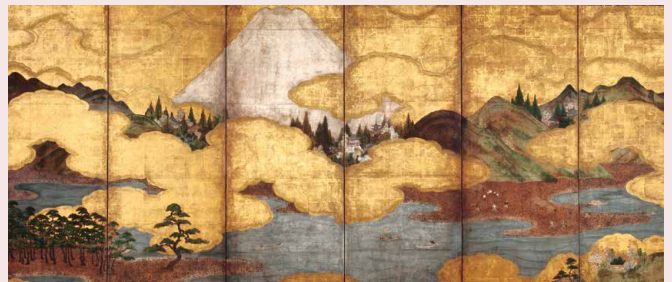
五年後の開館四〇周年に向けて、「五ヶ年計画」を策定中です。その柱のひとつにアーカイブの構築を立てます。「名品」の収集を最優先して出発した当館は、自らの歴史に関する情報をそれほど大切に扱って来ませんでした。初代館長にこんな発言があります。「ジャンク・ショップの倉庫に入ってしまうような作品は遺したくないと思ってる」（『藏品目録 一九八六年版』、ジャンクは「ガラクタ」の意）。しかし、「名品」を「名品」と呼び続けることもまた一種の棚上げ、というか神棚に祭り上げるようなものです。三十五年が経過してなお、それは「名品」であるのかという不断の問いかけが必要です。そのためには、情報の収集と蓄積と分析による検証が欠かせません。それは現役の、そして未来の美術館員がずっと担い続けるべき役割です。

静岡の「県立美術館」と 浜松の「市立美術館」 —双方の使命とその融合—

る県立美術館に足を運ばないという県民もいます。こうした現状を踏まえ、美術館が各市町へ出向き、より多くの県民にコレクションの価値や魅力を紹介しようという取り組みは、「県立美術館」としての使命感に駆られた意義深いものであると感じます。

本展は、「移動美術展」の一環として開催されるものですが、「超名品展」の言葉からも分かるように、例年の「移動美術展」とは一線を画すものです。その所以は、浜松市出身の静岡県立美術館長・木下直之氏が、故郷のために出陳作品を厳選し、展示構成を含めた本展全体を監修していることにあります。「超名品展」の名付け親でもある木下氏が、「広報物作成の際には『超』の字を大きくするように。」と指示されたのは、本展への思い入れやこだわりがよく表れたエピソードです。

本展の出陳作品は、絵画や彫刻、写真から映像作品に至るまで六十点以上を数えます。西洋画ではモネやゴッロ、日本洋画では和田英作や佐伯祐三等、著名な作家の作品が並び、「『名品』を『故郷の市民』に観てもらいたい。」という木下氏の意気込みが感じられます。また、浜松市や浜松市民を念頭に、秋野不矩、中村宏等、浜松ゆかりの作家の作品が意識的に選ばれている点も特筆されます。



《高士三保松原図屏風》(右隻) 16世紀後半(室町時代)

さて、浜松市美術館は開館以来、ガラス絵や大津絵、金銅仏等の多彩なコレクションを核に、市民の芸術・文化の拠点に相応しい作品を収集し、公開してきました。また、今年好評を博した、遠州地方の仏像に焦点を当てた「みほとけのキセキ―遠州・三河の寺宝展―」、遠州の民藝運動を支えた人々とその収集品を紹介した「遠州の民藝展」等、浜松ゆかりの芸術・文化に関する展覧会も数多く開催してきました。

館蔵のコレクションや浜松ゆかりの作家、浜松の芸術・文化についての調査・研究を深め、その成果を展覧会で市民へと還元することは、浜松の「市



佐伯祐三《ラ・クロッシュ》1927(昭和2)年

立美術館」としての大きな使命です。同時に、浜松に軸足を置きながら、静岡県内外問わず、多くの美術館・博物館とのつながりのもと、市民が多様な芸術・文化を享受する場を提供することも重要であると考えます。

静岡の「県立美術館」のコレクションから浜松市・浜松市民を念頭に厳選された幅広いジャンルの「超名品」を、浜松の「市立美術館」で鑑賞できる本展は、まさに、双方の美術館の使命の融合と言ってもよいのではないのでしょうか。折しも、今年、静岡県立美術館は開館三十五周年、浜松市美術館は開館五十周年を迎えました。双方の美術館の節目の年、両館の使命が相まみえた意義深い展示を、多くの方々に堪能頂けたら幸いです。

(浜松市美術館学芸員 島口直弥)

この度、浜松市美術館にて「静岡県立美術館超名品展 風景と人間」(以下「本展」)を開催する運びとなりました。静岡県立美術館は、所蔵する多くのコレクションの中でも、十七世紀以降の東洋・西洋の風景画、静岡県ゆかりの作家の作品、ロダンを核とした近現代彫刻の作品が充実しており、その質・量ともに「静岡県立」の名に相応しいものです。

静岡県立美術館は、これらの優れたコレクションをもとに、県内の各市町を会場に、「移動美術展」を開催しています。静岡県は東西に長く、広大な山間部や半島を抱え、静岡市に位置す

移動美術展 静岡県立美術館超名品展 風景と人間

2021年11月13日(土)～12月19日(日)
会場：浜松市美術館

今年の移動美術展は浜松市美術館を会場とし、木下直之館長の監修のもと、通常より規模を拡大して開催いたします。静岡県立美術館は工事のため、九月から年度末まで休館となりますが、浜松で当館のコレクションをご覧いただく機会を設けることができました。当館から遠方にお住まいの方々にも、コレクションに触れて頂ければ幸いです。

当館は開館から三十五年経ちますが、これまでに収集した作品は二七〇〇点以上になります。内輪の話になりますが、当館では制作年代や地域、制作技法等によって、西洋、日

本画、日本洋画、現代美術と、四つのジャンルを設定して、収集や管理をしています。今回の展覧会ではそれぞれのジャンルから「超名品」の数々を出品します。モネやゴッロ、佐伯祐三などの著名な画家や、静岡の誇る名勝を描いた《富士三保松原図屏風》、国際的な評価の上昇が続く焼津出身の石田徹也などの作品が並びます。

美術館（ミュージアム）とはまさに収集・分類するメカニズムです。こうしたジャンル分けの中にも、当館が前提としている美術「観」が浸透しています。本展は、これまでの当館の収集の成果を見せるとともに、その活動を見つめ直す機会となるでしょう。

言うまでもないことですが、予算的にも物理的にも制約がありますので、あらゆる作品を集めることは叶わず、収集方針に則って、当館として後世に残すべき作品を吟味し、収集を行っています。良かれ悪しかれ、その時代や地域の美術が分かれば良い、ということにはなりません。すなわち収集には価値判断が伴います。美術史上どのような位置づけであるのか、また当館が構築してきた



ポール・ゴーギャン 《家畜番の少女》1889年

コレクションとどのような関連性を持つのか、熟慮の上、選定します。そして、収集を継続し、研究、体系立てていくことで、コレクションの価値が高まります。すなわち、価値付与の側面もあるのです。こうしたダイナミズムのなかで、特に重要な位置づけが与えられた作品を「超名品」と言うこともできるのではないのでしょうか。

本展では、「天」、「地」、「人」の三つを中心的な章立てとして展示構成します。「天」の章では、人間を超えるものとして時間や自然に目を向けます。「地」の章では、地上で営まれる人間の暮らしに目を向けた芸



石田徹也 《燃料補給のような食事》1996（平成8）年

術家たちの仕事を紹介します。「人」の章では、人間に向き合う作品をご覧いただきます。人間の内面に迫るものもあれば、人間を追求すること、超越者や自然が立ち現れてくるものもあります。また、天と地をつなぐ「富士」や、地と人をつなぐ「物語」といったコーナーもあります。上記のような収集方針を少しずつ、組み替えた視点から、名品かどうかという評価は別にして、自由にコレクションをお楽しみください。そうした意味で「超名品」として、コレクションは皆さんに新しい顔を見せてくれるかもしれません。

（上席学芸員 植松 篤）

木村武山《羽衣》における 天女の図像について

石上充代

な姿を当たり前のものと思ってきたが、調べうちに、ここに表されたのは、古典仏画の学習をもとに創作された近代ならではの羽衣天女像であることが分かってきた。本作における羽衣天女の図像を検討し、その出自を明らかにすることで、作品理解の一助としたい。

羽衣天女の図像

まず羽衣説話に基づく天女の姿がどのように表現されてきたかについて、龍野有子¹⁾氏の研究にもとづいて概観する。江戸中期から明治期にかけて、天下った天女の持物としての羽衣は、「一对の翼と長大な尾羽が一体となった装着物」として表されるのが常であり、天女は唐美人風であるのが一般的だった。やがて、天下った天女と、仏教的な空飛ぶ天人―飛天とが混同されていき、菩薩形の飛天の姿で表された羽衣天女が登場するようになる。上半身に条帛と天衣をまとい下半身には裳を着けたその姿は、大正期に次第に定着していった。

翼無しで空を舞う飛天のイメージを宿すことで、羽衣天女は、飛翔にあたり翼を必要としなくなった。木村武山《羽衣》における天女にも翼はなく、昭和初期らしい姿といえよう。しかし、着衣は飛天のものとは異なり、武山の他の作例で探せば《弁財天図》などのそれに類似する。女性形の天部像の服制を模した着衣で表されるという点、本作の天女は特徴的な姿を見せるのである。吉祥天や弁財天といった女性形の天部像の服制には、高貴な中国女性の着衣が

参照されており、飛天に比べればより華美で重厚なものとなる。仏画を多く手がけ、古画研究にも熱心であった武山が、飛天と天部像の図像の違いに無頓着であったとは考えづらく、あえて天部像の服制を採用したものであろう。

しかし、飛天が軽やかな着衣であることには、それなりに意味があったはずである。翼無しで人体が空を舞う様を説得力をもって表現することは、竹内栖鳳が東本願寺御影堂天井画制作にあたり裸体モデルを使って試行錯誤を重ねたように、また西山翠嶂《春霞》(一九一九年)の羽衣天女が、空を飛んでいるように見えない、と批判を受けたように、やはり簡単なことではない。身に付ける衣についても、空飛ぶ様子を視覚的に補強するためには軽快であるのがふさわしく思われる。その点、武山の羽衣天女はどうしても重たげな印象を与えるが、この重々しい天女を空に浮かばせるために武山が施した工夫が、既存の型を援用することであった。

飛翔の型―法界寺阿弥陀堂飛天図

武山が拠り所としたのは、第一に法界寺阿弥陀堂に残る鎌倉時代の飛天図である。法界寺は、日野薬師と呼ばれる薬師如来を本尊とする寺院だが、鎌倉時代の阿弥陀堂と阿弥陀如来像で名高い。阿弥陀堂は、一八九七年(明治三十年)に古社寺保存法が制定されると最初の建造物指定の折に指定品となった建物であり、内部には壁画が残され、そのうち内陣長押上の四方の土壁に

飛天図十体が描かれる。

このうち、西側北端の飛天が、武山の《羽衣》の元となった図である(図2)。反転されているが、強く体を曲げて上半身を起こし、後ろを振り返る姿勢、斜め上方に伸びる下半身の角度などが近似する。加えて、たなびく裳の先端の形状や、足裏と天衣の重なり、両足の親指がいずれも同じ向きに描かれることなど、細部の共通点を挙げれば、武山がこの飛天図を用いて天女像を形作ったことは疑いなくろう。

法界寺阿弥陀堂の飛天図は、一八九七年の『國華』掲載を初出として、近代の出版活動の最初期から、図版掲載や作品紹介が頻繁になされた作品であった。制作者向けの書籍にも紹介され、いわば制作のための

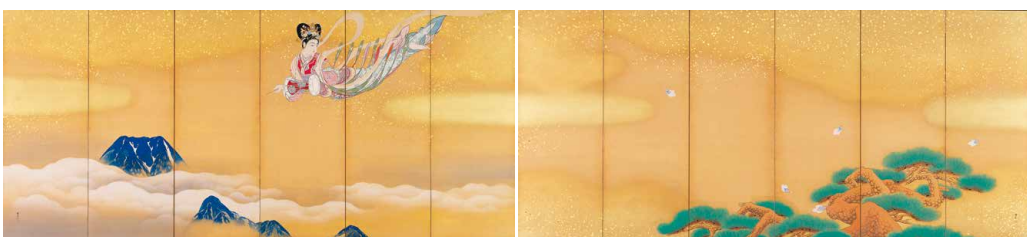


図1 木村武山《羽衣》昭和初期 静岡県立美術館蔵

木村武山《羽衣》(図1)は、三保の羽衣説話を主題とした六曲一双屏風である。三保からさほど遠くない場所に建つ当館にとって羽衣説話は必修テーマといえるが、天女そのものの姿を描いた日本画の所蔵品は本作のみ。そのためか、羽衣天女といえ、華麗な装束に身を包み天衣をひるがえして飛翔する、つまり本作に描かれるよう



羽衣 部分



図2 法界寺阿弥陀堂飛天図（西側北端）※「國華」98号より左右反転のうえ転載

素材として扱われてもいる。早くから仏画の名品として高い評価が与えられ、かつ図版等を通して細やかな参照が可能だった法界寺飛天図は、空飛ぶ人体の型を学ぶには格好の材料だったのである。

姿勢としては無理があるが空中にあってしかあり得ないその形は、飛翔するということの超俗性や運動性を感じさせる。表現についてみれば、法界寺の飛天は、肥瘦のある滑らかな線を駆使して生き生きとした柔軟な身体表現を見せ、武山の天女が鉄線描風の均質な線で形作られ、端正な優美さを主眼とするのとはずいぶん趣が異なる。仏画における武山自身の様式がすでに完成されていたなかで、飛翔の型のみを学んだものと理解できよう。

たなびく带状の飾り―薬師寺吉祥天像

もうひとつ、古画に由来すると考えられるのが、下衣の左右に五本ずつひるがえる、先端が尖った带状のモチーフである。法界寺阿弥陀堂飛天図には無く、武山の他の仏画にも見当たらないこの特異な形は、薬師寺吉祥天像に学んだものであろう。

薬師寺吉祥天像は天平の名画としてつとに知られ、やはり早くから図版掲載の機会が多かった作品である。斜め向きの立像として描かれ、後方に向かってたなびく着衣の装飾が軽やかな運動性を感じさせる。下衣からつながる幾本もの带状の飾りは、裏に表にひるがえりながら、ほぼ等間隔を保って流麗に空中を流れており、このモチーフと、武山の羽衣天女の下衣の飾りが、大変よく類似しているのである。羽衣天女の場合には下からの風を受けて空高く舞う様を表すのであろう、飾りが上方に向けてたなびく描写が浮遊感を強めている。

古画の意義

《羽衣》の天女を描くにあたり、武山が、法界寺阿弥陀堂飛天図、また薬師寺吉祥天像という仏画の名品を、飛翔の表現と結びつけて転用していることを確認したが、古

画を参照することの意味は、造形的な援用にとどまらない。これらの仏画は、近代以降、模範として仰ぐべき日本美術の古典として認識されるようになっており、名画として著名な飛天図、吉祥天像に連なる姿として天女を描くことは、本作における天女像の、さらには屏風そのものの格を高めることにもつながったものと考えられる。

真摯な古典学習を元に、確実な技術と優れた色彩感覚をもって堅実に作品を練り上げていくことは、画家としての木村武山の一貫した特質である。本作でも、仏画の研究と制作の実績を基礎としながら、昭和初期らしい羽衣天女の姿―図像においても、形の典拠においても―を作り上げたものであり、近代画家、武山の特色がよく観察される作品といえる。

- 1 龍野有子「『有翼の天女図』考―本多錦吉郎『羽衣天女』（明治二十三年）を中心に―」、岡山大学文学部プロジェクト研究報告書4『語り出す図像―視覚資料の可能性』二〇〇五年三月、五七―七八頁、および同「有翼の天女図」再考―失われた『羽衣』像』二〇一一年七月二十三日明治美術学会例会発表要旨、『近代画説』二二一―二二二頁、二二〇―二二二頁
- 2 成田山新勝寺奥殿襖絵「天人奏楽」（一九三七年）では、より直接的な法界寺阿弥陀堂飛天図の転用が見られる。当館所蔵屏風より後年の作ではあるが、武山が本飛天図を学んでいたことの証左となる。
- 3 「法界寺壁画」、「國華」九八号、一八九七年、二五―二六頁 法界寺阿弥陀堂の飛天図十体のうち、武山が特に参照したと考えられる西側北端の木版色摺図版が掲載される。

偶土!
= を読む
130年間
解けられなかった
縄文神話の謎
竹倉史人
著

本の窓

竹倉史人 著
「土偶を読む」
130年間解かれなかった
縄文神話の謎
晶文社 二〇二二年

不思議で魅力的な造形をした土偶。そのモチーフは、実は縄文人の食料となるドンケリやクルミ、貝類等だったとする新説がこの本で展開されています。しかも、著者は考古学者ではなく、人類学者です。時には、著者（とアシスタント）は「縄文脳インストール作戦」と称するフィールドワークを行って手がかりを探ります。

確かに土偶とモチーフとされる生物を比較すると、造形的に似通っているように思えます。それだけに留まらず、著者はそれら生物の分布や発掘資料を丁寧に調べることで、その説をより確かなものとしています。土偶には具体的なモチーフがあるのではないかという着想から、次々と土偶の正体に迫っていく様子は読み応えがあります。土偶には自然の恵みへの祈りが込められていたとすると、縄文人が身近に感じられなかったのでしょうか。（上席学芸員 植松 篤）

風景が結んだご縁

主任学芸員 貴家映子 きみがえいこ

この四月より学芸課に着任しました貴家映子と申します。よろしくお願いたしません。

二〇一二年から二〇一九年三月までは、三重県津市にある三重県立美術館に勤務していました。西洋美術担当としての採用でしたが、食べ物や猫がテーマの展覧会、ポスター作家の個展、現代アートのグループ展など、様々な企画に携わることができました。

静岡県立美術館とは、三重県美在職中にも、巡回展のお手伝いをさせていたご縁がありました。ただ、いま振り返れば、このご縁は、大学の講義で風景画の魅力に出会ったときから、始まっていたのかもしれない。



エルミタージュ美術館にてボナール作《地中海》のまえて（2018年撮影）

目の前を通り過ぎていく何気ない光景が、見る人の経験や文化的背景と結びつき、記憶に残る風景となる。そのことに、静かな衝撃を受けたのを覚えています。そして、自然の姿をそのまま描いたような、一見、中立的かつ普遍的に見える風景画にも、固有の歴史性や複雑な読解の可能性があることに、興味を引かれました。

その後、一九世紀末から二十世紀前半に活躍したフランス人画家ピエール・ボナールを研究対象に選び、卒業論文では窓を、修士論文では風景をモチーフとした作品を論じました。風景画の全盛期ともいえる印象派の時代が終わり、抽象絵画や超現実主義が前衛芸術の主流となっていくなかで、身近な風景を描き続けたボナールの芸術をどう位置づけるのか。そんな問いに取り組むうち、近現代の多様な風景表現にまで関心が広がっていきました。

静岡県立美術館には、クロード・ロランやヤーコブ・ファン・ロイスダールなど、風景画界のスーパースターたちによる珠玉の作品が収蔵されています。いまはまだ見慣れぬ顔の作品たちですが、研究を深めていくにつれて、「あれ？こんな表情も見せてくれるの？」という発見に出会うのが楽しみです。その成果とともに、風景の尽きせぬ魅力を来場者の皆さまに伝えていきたいと思っています。

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡I.C.、清水I.C.から約25分 日本平久能山スマートI.C.から約15分
- ◎新東名高速道路 新静岡I.C.から約25分

ウェブサイト：<http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

休館のお知らせ

令和4年3月31日(木)まで設備改修工事のため休館

移動美術展のお知らせ

静岡県立美術館 超名品展 風景と人間

会場 浜松市美術館

会期 11月13日(土)～12月19日(日)

今年の移動美術展は開館35周年記念の特別版。館長・木下直之が監修を務め、当館コレクションからとびきりの名品を選びすぎり、浜松でお目にかけます。ここでしか見られないぜいたくな超名品展、ご期待ください。

静岡県立美術館 友の会

静岡県立美術館友の会は、「芸術を愛する人々が、会員相互の親睦を深め美術館の活動を後援し、芸術文化の普及を図っていく」という理念のもと、美術館の協力を得て活動しております。講演会・講座などの主催や講演・会報の発行・鑑賞会・研修旅行を実施しています。さらに美術館活動への協力・援助を通して、県民1人ひとりに愛され親しまれる美術館となるよう協力しています。

事業委員、会報委員募集中

友の会では委員の皆さんと一緒に実技講座、研修旅行の計画、運営、友の会だより「フロムナード」の企画、取材、原稿依頼と一緒にお手伝いしてくださる方を募集しています。ぜひお気軽に参加ください。

友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。